



こどもの本から

異文化をつなぐ子どもたち

大沢 啓子

たくさんある絵本の中からこの『いっしょがいちばん』を手にとったのは、まず表紙にひかれたからである。どくろの旗印の小舟には、ぶたととりが座り、舟に引かれた浮輪には泳ぎは得意のはずのさかながしがみついている。これからどんな冒険が始まるのか、どんなおもしろい話が展開するのか……、漠然とそんな思いでページを開いた。ところがいつ

までたっても冒険は始まらず、ついに海賊船も宝の山も何もないままこの話は終わってしまったのだ。「なに、これ!」。しかし、あてがはずれた思いとは別に、何かほわっとした暖かい感じが心の中に残った。何とも可愛く描かれた三匹の仲良しぶりだ。

さかなのハラルドは、自分の住んでいる沼にさかなの子どもがいなのが少々不満。一緒に遊べる友だちが欲しいのだ。「ともだちといっしょなら、もっとおもしろいよ、ずっとたのしいよ」と父さんと母さんを困らせている。農場に住むこぶたのインゲもパパやママや農場の大人たちに遊んでもらうだけではもの足りない。「わたし、ほかの子とあそびたいの」。こどりのフィリップも同じで、「ぼく、プタみたいにとろんこのなかでころげまわったり、さかなみたいに沼でおよいだりしたいんだ」と、わからずやを言っている。

どうやらハラルドもインゲもフィリップも、兄弟はもちろん友だちもないようだ。やさしい両親や大人たちに囲まれ、愛情深く育てられてはいるものの、やはり子どもと一緒に遊びたい。友だちがいたらどんなに楽しいだろうと思いついて描いていたのだ。

そんな三匹が沼の岸で引かれるように出会った。

さかなのハラルドは泳げて少し飛べるけれど、歩けない。ぶたのインゲは歩いて少し泳げるけれど、飛べないし、こどりのフィリップは飛べて少し歩けるけれど、泳ぐことはできない。それぞれ得意なこと、少しだけできること、全くできないことがバラ

▲「いっしょがいちばん」

フリードリヒ・カール・ヴェヒター作・絵
吉原高志訳 徳間書店 二〇〇一年



バラの三匹が、お互いに教え合いながら、手伝いながら一緒に練習していると、だんだん同じことができるようになってきた。一緒に水の中を泳いだり、野原を歩いたり、空まで飛べるようになってきたのだ。しかも三匹とも遊びながら、おなかやおしりやはなをべったんことくつつけ合つてとても楽しそう。

三匹の父さんと母さんは、子どもたちが元気に明るくなったのを見て、「おかしな、かわつた、へんてこなともだちのおかげかな？」と驚いたりよろこんだりと、子どもたちの友情を歓迎しているところでこの話は終わっている。

なんと可愛い、そしてなんと奇想天外な話なのだろう。この三匹の子どもたち、水のなかのさかなと陸のこぶたと空のことり、それぞれ住む世界が違うのに気持ちに通じている。さかなはさかなの友を、

ことりはこつりの友を見つけたのではなく、水、陸、空と全く違う世界の友だちと出会い、仲良くなったのだ。本来、さかなとこつりとぶたが同じ空間で遊ぶなんてことはあり得ないことなのだが、この絵本はなんの疑いもなく三匹が一緒に遊ぶ。さかなが道を歩くなんて、ぶたが空を飛ぶなんて、何と奇抜で楽しい展開なのだろう。三匹は擬人化された動物とはいえ、水、陸、空の住人の代表として描かれているのに、ぶたやさかなが空を飛ぶという発想は読者の想像を心地よく裏切ってくれる。そして、三匹が水辺ではなやおなかをくつつけて遊ぶ場面は何ともいえずユーモラスで可愛い。からだをくつつけ合うだけでもう楽しくてしかたがないという興奮ぶりにも、ヘンな遊び方、でもおかしいね、と笑ってしまう。こんなところに作者フリードリッヒ・ヴェヒターのユーモアと発想のおもしろさがあるのだろう。この本は一九七三年にドイツで出版され、以来

読みつがれていることであるが、三十年経った現在も少しも古さを感じさせないのは、こんなおもしろさにひかれるからにちがいない。

それぞれが同種の仲間と遊んでいる場面は、楽しそうではあるが人数が増えれば遊びの規模が大きくなるだけで遊びの発想は変わらない。しかし三匹がそろって遊び、お互いに相手の遊びをしようとすることで、自分のカラをつきぬけ新しい世界を獲得する。ことりは水のなかを泳ぎ、さかなは野原を歩き、ぶたは空を飛ぶ。この場面は生き生きと描かれ、最後は三匹そろって空のかなたへ飛んでいってしまう。そこには無限の想像の世界が広がっている。三匹はどこまで飛んでいくのだろう……？

この絵本にはおまけが付いていて、最後に五ペーシにわたって遊びに使うアイテムが描かれている。どくろの旗印にうきぶくろ、インディアンのはねかざりやカウボーイの帽子、等々。これを切り抜けば

そのまま遊びに使えるわけだ。ここでようやく表紙の意味が分かり、現実にはひきもどされた。表紙の冒険はこれから始まる。ここからの話の主人公は読者である子どもたちであり、いろんな小道具を作って、自分たちの遊びを思いっきり楽しむ。わくわくするような冒険ごっこは自分たちで作っていくのだ。友だちとみんなで頭を寄せ合って、何をしようか、どこに行こうか、相談しながら決めていく。たとえ一人ではできなくても、みんなで気持ち合わせれば楽しさは倍増、どんなことでもできてしまう世界なのだ。遊びとなれば子どもたちは得意、なつたつもりで遊ぶのも大得意だ。その気になればさかなが道を歩いたりぶたが空を飛ぶのは朝飯前なのかもしれない。

仲良しの友だちと暖かく見守ってくれる大人たち。準備はOK。さあ、海賊船の出帆だ。

(舞々同人)